

共催：早稲田大学 ソーシャル & ヒューマン・キャピタル (WISH) 研究所
ソーシャルイノベーション・アカデミー
一般社団法人 DSIA (Durable Social Innovation Alliance)
日時：2017 年 9 月 7 日 13:00-14:30
場所：早稲田大学・早稲田キャンパス 9 号館 558 会議室

ソーシャルイノベーション・セミナー
「非貨幣経済の影響と新たな社会経済システムの
将来展望：都市の廃棄物を農村の資源に変える！」
アンシュ・グプタ (非営利団体 Goonj 創設者)



島岡未来子先生(島岡)： 本日は、早稲田大学ソーシャル & ヒューマン・キャピタル (WISH) 研究所、ソーシャルイノベーション・アカデミー、そして、一般社団法人 DSIA (Durable Social Innovation Alliance) 共催の、ソーシャルイノベーション・セミナーへご参加頂き、どうもありがとうございます。私は、本日の司会を務めさせて頂く、早稲田大学研究戦略センター・准教授、WISH 研究所研究員の島岡未来子と申します。どうぞよろしくお願い致します。本日は、インドの NGO である Goonj の創設者で、社会起業家であるアンシュ・グプタ先生をゲストスピーカーにお迎えし、非常にタイムリーな話題についてお話をさせて頂きます。グプタ先生のお話の前に、WISH 研究所の所長である野口晴子先生より、セミナー開催に当たって、ご挨拶を頂きます。



野口晴子先生(野口)： 島岡先生、どうもありがとうございます。本日、グプタ先生を早稲田大学にお招きすることが出来たのは、ひとえに島岡先生、共催機関であるソーシャルイノベーション・アカデミー、そして、DSIA 様のおかげと、心より感謝申し上げます。本日はご講演頂きますアンシュ・グプタ先生に心より御礼申し上げたいと思います。最初に、アンシュ・グプタ先生のご経歴について簡単にご紹介した後、せっかくの機会です



ので、少しお時間を頂戴して、WISH 研究所についてお話をさせて頂きます。

アンシュ・グプタ先生は、インドでは、「衣服の人 (clothing man)」として広く知られていらっしゃる方です。大学でマスコミュニケーションを学ばれ、経済学の修士号を取得された後、フリージャーナリストを経て、1998年に非営利団体Goongjを創設されました。Goongjは、本日お話を聞かせて頂く、「Cloth for Work」や「Not Just a Piece of Cloth」等、布材を使った独創的な開発モデルで知られています。毎年農村で3,000以上のインフラ開発事業を実施し、水源の確保から道路の修復、竹橋づくりまで幅広い活動を行っている団体です。災害時には農村部のコミュニティを巻き込み、住民自らが緊急支援活動や復興事業に従事し、その対価として衣服を提供するモデルが高い評価を得ています。

グプタ氏は、都市部で不要になった布等の物資が、農村部では価値ある資源となることに着目し、それらを金銭の代わりに労働対価として付与する等、独創的な取り組みで社会変革を起こされてきました。このような非市場アプローチを用いた新しい経済モデルを構築し、供与の精神をインドに根付かせたことにより、Goongjの活動はインド全域に広まり、農村部の発展を後押ししています。グプタ氏は数々の国際フォーラムで、世界中で問題となっている「見過ごされがちな課題 (non issue)」についてお話をされ、ドナーと受益者としてではなく、双方を「当事者」として扱えば、大きな問題は小さな取り組みによって解決出来ると説かれていらっしゃいます。

グプタ先生は、2015年にはアジアのノーベル賞とも呼ばれるラモン・マグサイサイ賞を受賞。シュワブ財団やアショカ・フェローに選拔されたほか、『フォーブス』誌でインド有数の社会起業家として紹介されております。

グプタ先生を私どものWISH研究所にお招き出来たことは大変意味のあることです。といいますのも、グプタ先生の活動は、まさしく、私どものWISH研究所が目指すべき理念と方向性を、現場での「実践」によって指し示して下さっているからです。では、ここで少しWISH研究所の概要についてお話をさせて頂くことにします。

人口の急激な少子高齢化に伴い、労働力としての移民を受け入れてきた欧米では、難民問題が深刻化しております。また、OECDのほとんどの国において、子ども貧困率が社会全体の貧困率よりも高く、また、増加傾向にあることは皆さんご存知の通りです。20世紀後半以降、先進地域における経済成長の鈍化が人口動態の劇的な変容に拍車をかけ、さらには、国家によるパターナリズムの下で充実が図られてきた公助・共助機能の持続可能性が

危ぶまれている状況です。現在、こうした様々な要因が、human capital(HC)の蓄積過程の阻害要因となる貧困や格差、さらには、人々の間に紛争をもたらし、「個」や「世代」を超えた負の連鎖を引き起こしています。こうした社会不安は、21世紀における地球規模での共通課題といえるでしょう。

そこで、WISH研究所では、教育や健康に代表されるHCが、「個」としていかに蓄積され、「個」や「世代」を超えていかに継承されるか、そのメカニズムの本質について、量的・質的なビッグデータの活用やフィールドでの調査・実験を通じて、社会経済的要因やsocial capital(SC)とHCとの関連性に着目した様々な仮説に対する実証と理論の両側面からの検証を行っています。WISHが掲げるテーマは、国際社会が向き合わなければならない喫緊の政策課題であると同時に、人類社会にとっての持続可能な社会システムの在り方を模索する上で不可欠な中・長期的な課題でもあらうかと思います。近・現代を通じた研究の結果、HCを代表する教育・健康や社会経済的要因との間に有意な相関が存在することについては、概ね、研究者間でコンセンサスが得られています。しかし、多岐にわたる様々な要因が、どのようなメカニズムを通じて私たちのHCと相互に関連し合うのか、また、その影響の有意性や大きさはどの程度のものなのか、といった問いに対する確たる結論は、理論的にも実証的にも得られておりません。

また、従来の人的資本論は、個に閉ざされたHCの蓄積過程を明らかにする一方、「個」に蓄積されたHCが、「個」や「世代」を超えて、コミュニティや人類社会に継承され、SCの蓄積に寄与するものなのか、という問題意識に対しては十分な回答を与えているとは言えません。HCには外部効果があり過小に蓄積されてしまう可能性が高く、HCの蓄積が個に規定されている限り、効率的にHCを蓄積出来る個と出来ない個の間での格差が拡張し、それが現代における社会不安や紛争の主要な原因の1つとなっているのではないのでしょうか。以上のような問題意識に基づいて、WISHでは、「医療・介護」、「教育」、「環境」、「開発」等の具体的なテーマを対象に、SCの蓄積からHCの蓄積へ、または、HCの蓄積からSCの蓄積へと、双方向の扉の鍵を見つけ出すことを目的としています。グプタ先生のGoonjでの活動は、私たちのそうした問いかけへの数々の教訓を与えてくださることと思います。それでは、何卒よろしくお願い申し上げます。

島岡: 野口先生、どうもありがとうございました。それでは、グプタ先生、ご講演のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

アンシュ・グプタ先生(グプタ): 皆さま、こんにちは。私はインドからやってまいりました。私のこれからの話はインドのストーリーです。ただ、これはインドの話というだけではありません。全ての問題、貧困、そうしたものは世界の半分においては共通の課題ではないかと思っています。なので、私はインドの話をしませんが、グローバルな話と思って聞いて頂ければと思います。課題もそうですし、ソリューション（解決法）というのも世界に共通の点があると思います。



グプタ: 私の活動は非常に小さな活動から始まりましたが、今、67のプロジェクトがあって、3万以上の人たちを助けています。オフィスが12。インド国内では、その活動は非常に大きく認められるようになっていきます。ただ、それでも、自分は寝る前に胸に手を置いて、人々のことを思います。私は様々な会議に参加して、そういったたくさんの人たちの人生を変えたという話をします。けれども、まだまだたくさんの人たちが助かっていない。その助かっていない現実に対して私はもしかしたら、ものの考え方ということが非常に影響しているのではないかと思います。それについてこれからお話ししたいと思います。

グプタ: 私たちにも働き方、考え方、日頃慣れたそういったものがありますが、それを変えるということが必要なのではないかと。根本的に考え方を変えるということが必要なのではないかと思います。これからお話しすること、私はここで「見過ごされがちな課題 (non issue)」ということを取り上げたいと思います。いろいろな課題があります。教育の問題、環境の問題、開発分野における様々な問題がありますが、その中でも取り上げられない問題、見過ごされがちな問題、それについてこれからお話をします。

グプタ: 人間のベーシックヒューマンニーズ、人間にとって最低限必要な基本的なニーズとして衣食住があります。その中でとくに食糧と住む場所について語られることが多いけれど、衣料、衣服についてはどうでしょうか。衣服については、時に災害が起きたとき、あるいは津波のとき、そういったときに必ず衣服を慈善活動として寄付する、というときに出てきます。しかし、実際には、冬、寒さの中で死ぬ人のほうが災害時に死ぬ人よりも多いという現実もあります。

グプタ: 1991年、私

は当時まだジャーナリストとして働いていました。そのときに出会った様子です。この右の写真。このリキシャは、死体を運ぶものです。インドの様々な場所でホームレスがたく



The Non Issue

さんいます。あるいはスラム街もあります。そういった所で亡くなった人の遺体を運ぶリキシャです。そして、この左側の写真に映っている人々。彼らは、路上に放置された遺体を運ぶということをフルタイムの仕事としている、なりわいとしている人たちです。大体、死体1体につき20ルピー、日本円にすると約30~35円ぐらいという賃金を地方警察からもらってやっているという状態です。繰り返しますが、これはインドの話ではあるものの、いわゆる先進国の都市にも45,000人のホームレスがいることを忘れてはいけません。

グプタ: 彼らから話を聞いて知ったのですが、冬には大体1日45キロ歩いて、大体10体から20体の遺体を見つけることが出来るのだそうです。夏だと、それが4~5体ということでした。そして、もっとショッキングなことを、この2人の間にいる娘さんが言っていました。彼女いわく「寒いときは死体に身を寄せて死体で体を温めるの」と。父親いわく「何の問題もない。なぜならブランケットのようにひっくり返ってめくれてしまったりしないから」。最初、私は死体というのは冷たいものだと思っていました。ですから、この暖かいという言葉の意味がよく分からなかったのです。理解するのに何年もかかりました。ただ、次第に、こうした現実を数多く目にして理解出来るようになりました。そして同時に、寒さが人の命を奪うのではないのかもしれないと気付いたのです。もし寒さが人の命を奪うのであれば、自分だって死んでいたでしょう。同じ神様の下で、私は生き延び、別の誰かが亡くなる。寒さじゃないんです。自分は普段服を着ているからそういった経験をする事が出来ない。寒さが人を殺しているのではなくて、体を温める衣類がないこと、それが死に結びついているということが分かってくるようになりました。



Cloth For Work

Turning age-old charitable act into dignified giving!!

グプタ: この事件やその他多くの事件から6~7年経った後、私はジャーナリストの仕事を辞めて、団体を立ち上げました。そして、この「労働の対価としての衣服 (Cloth for Work)」というプロジェクトを立ち上げました。今、ミレニアム開発目標や持続可能な開

発目標等、例えば、ドメスティックバイオレンス、家庭内暴力からグローバル・ウォーミング、地球環境、地球の温暖化まで、100から150位の様々な課題が挙げられています。しかしながら、その中に衣服の問題、衣料の問題というのは必ずしも取り上げられていません。私は、食べ物はなくともしばらくは生きることが出来ます。しかし、服、着る物がなかったらどうでしょうか。貧困という課題の中において、誰が貧しいか、誰が貧しくないか。実は、一番見過ごされている、服の、衣料の問題というのがそこにあると思います。教養や文化や言動に基づくのではなく、残念ながらその人が着ているもので判断するのです。それが貧困を示す最初のサインなのです。それをどうして無視することが出来るのでしょうか？それが1点目です。2番目に、衣服を提供するという慈善活動は、衣服を寄付といわれていますが、寄付ではなくて、実際には私たちが必要なくなった衣服を処理したり、かたづけたりしているというのが現実でしょう。彼らは、私にとって使用価値のない物に第2の生命を与え、生かしてくれているのです。したがって、寄付と呼ぶのはやめましょう。そして、衣服を生かしてくれる人々に感謝しましょう。

グプタ: 私の仕事は旧来型の慈善行為を尊厳のある供与にすることです。世界中の村人と話をすると、村人たちの最大の資産というのは、実は、彼らの尊厳です。都市で私たちは、よく物乞いを目にしますが、村においては物乞いを目にすることはないでしょう。物乞いというのは、都市に特有の現象です。私たちは、村人たちに慈善活動として物をもらうような行為をさせません。彼ら自身のイニシアチブによって彼らが尊厳を保った形で生活を良くしていく。そのための活動をしています。だから私たちは、膨大な量の布生地を集めているのです。私たちはまず個人の服6~7ユニットくらいから始めました。前にも言いましたが、3,000トンもの布生地を集めれば、なんでもサポートすることが出来ます。私たちにとって尊厳は大事なので、配布はしません。このようにして「Cloth for Work」の概念が生まれたのです。新しく活動に参加した者はそれぞれ独自の取り組みに着手しま

す。今から、私たちが、どのように業務を行っているかをお見せするために、何枚か写真をお見せしましょう。

グプタ: 私たちがインドでどのような仕事をしているか簡単にお見せしたいのですが、私たちは現在3,000余りの非常に広範な活動を展開しています。Goonjのモデルでは、人々はまず何が課題かを考え選択します。これはトップダウン型の取り組みではありません。全ての村に道路が出来る等と言って回っている政府の機関でもありません。今、自分たちは、道路が必要なのか、池をきれいにしたいのか、橋を造りたいのか、学校を建てたいのか、村の人々自身でやりたいことを何でも決めます。彼ら自身が取り組み、何日か働いた後、その対価として、都市部からもらってきた衣服やそれ以外の素材をもらいます。これらの衣服や素材は、世界の他の場所では常に慈善活動で配布されてきたものですが、私たちはこれを通貨として使っているのです。開発のための通貨として使うのです。ここで少し写真をお見せしましょう。その様子をご説明したいと思います。

グプタ: これが村にある水、水源の1つですね。体を洗ったり、そこで働いたりといったことをしています。



グプタ: ご覧のように、こんな辺境池に機械を持ち込むことは出来ないのです、機械は使っていません。インドには600,000もの村があります。そのほとんどが険しい地形のために、機械類を使うことは出来ません。したがって、伝統的な知恵や強みを蘇らせなければいけないのです。

グプタ: これは、1つの例ですけれども、ある地方の村に道というのがありません。それをみんなで何とかするために作業をしているところです。実際に舗装が入る予定だったかもしれませんが、何もされないまま残されている、そういった所にこういった、例えばパイプがありました。それをどのように運ぶかというのも彼ら自身の知恵で考えて実行します。これが実際に作業した後に出来た道です。これは100%手作業です。地域の知恵と地域の工具を駆使して、5つの村から人々が集まって造ったのがこの道です。

Locals from many villages got together to make a 2 km road



The success ..



グプタ: 今インドでは、皆ハンドポンプに頼りつつあるので水位が下がり、井戸が乾き始めています。しかし、去年のように干ばつが起ると、我が国の半分はまた井戸を掘り始めます。インドの地方における産業の70パーセントというのは、実は農業に頼っています。しかしながら、今申し上げた理由で、インドの地方では水源が乏しくなるどころか、水源そのものがなくなっているという状況が来ています。本来であれば、村に1つはそうした水源、生活のための水源というのが必要です。かつ、その水源が確保されていないと、農業を営むことも出来ません。農業を営むことが出来ないということは、雇用がないということになります。今、インドでは、地方から都市への人の流れ、流入ということが非常に大きく問題となっています。それは、都市への憧れだといったような考え方も取り上げられることがあります。それは真実ではありません。実は、地方に水がないということが一番の問題なのです。水がなければ農業が出来ない。農業が出来なければ働くことが出来ない。働き口がなければ、移住するしかありません。これは強制的な移住であって、選択肢があつての移住ではないんです。

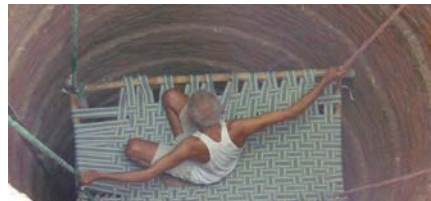


Digging up wells in water parched areas with the power of people

グプタ: 水の問題というのは、インドだけではなくて世界の他の地域にも共通する課題だと思います。水の話をするとき、飲み水がないということがよくいわれます。無論、飲み水もイシューです。しかし、農業を営むための水がないということのほうがより深刻な影響をもたらします。なぜ

かという、先ほど申し上げたように、農業に70パーセント頼っている地域における農業が出来ない状況というのは、イコール仕事が出来ないという状況なわけです。仕事がない、そして、自分たちの選択ではなく、仕方がなく都市に流れていく、そういったことが今の人口流入の問題の源泉にはあるわけです。それを、だからこそ、私はこれをノンイシュー、見過ごされがちな問題と呼んでいます。

グプタ: 皆さん、この写真をご覧ください。この井戸の中の階段を下っている人々。この人たちは、皆さんの目には、労働者と映るかと思えます。労働者。英語でunemployerとかunskilled workerとか、unという非雇用、非熟練労働者といった、その『非』という否定的な接



頭辞が付きます。しかしながら、私がここで強調したいのは、彼らはそういう受け身の存在ではないということです。彼ら自身が最大のgiver、供与が出来人々であるということです。そこには、受益者であるとか、ドナーであるとか、そういった区別はないと私は捉えています。全ての人々がステークホルダーであると考えています。そして、この仕組み自体を見ると、左下の写真でみんなが持っているものが衣服であるとか、彼らが労働の対価としてもらう物なんです。そこには貨幣というものが介在していません。これ

は、従来型の貨幣経済の枠組みではなく、彼ら自身が労働の対価として物をもらうという、インドではシャンバラと呼ばれていたのですが、そもそもこの地方の村にあったコミュニティレイバーの在り方なのです。これは伝統的な物々交換経済の、労働と衣服や素材という2種類の新しい通貨によるシステムの復活なのです。お金は、物流に影響をもつ唯一の通貨と思われがちです。しかし、こうした地域では、お金よりも重要な通貨が、衣服や素材、そして、人々の労働なのです。そこには提供者も受益者もない。全員がステークホルダーなのです。私は、こうした現象を、貨幣を基盤とした現代の考え方にチャレンジする新しい非貨幣経済のモデルだというふうに捉えています。

グプタ: 彼らが今運んでいる物、そして、受け取った品物には700~800万ドルの価値があります。そして、彼らを労働力として見たときに彼らがこうした物を運ぶという労働をしていること自体に金銭的には1200万ドルの価値がある、あえて貨幣価値に換算してみると非常に大きな価値があるということが分かります。

グプタ: もう1つ、マングローブの例を挙げましょう。これは、最近まで大変大きな湖でした。100,000平方メートルもの湖がシュリーナガルという街にあり、インドでも指折りの美しい湖だったのですが、「Cloth for Work」という取り組みの一環として160人、300人もの人々が集まって100,000平方メートルもの湖を綺麗にしたのです。この活動の最も大きなインパクトは、人々がこの概念や地域についてオーナーシップを得ただけでなく、間接的にも直接的にも地方自治体にアクションを取るよう大いに圧力をかけたことです。市民が何か物事を自分たちの手で解決しようとするとき、市民からの問いかけに自治体は応えるしかないのです。



Mangroves; Conserving the ecology of Sunder bans



"If we continue to organize such events, the old beauty of Dal Lake will be restored and the polluted Dal will become free from different polluted materials". - says Ghulam Ahmad, a resident and participant.

グプタ: これは、カシミールのダル湖です。巨大な湖です。時間が許せば、ここでの事業について1分程度の動画を用意しています。お見せ出来れば、事業がどのように行われているか、プロセスをご理解頂けるとと思います。もう2, 3点お話をさせて頂いてから、ディスカッションに移りたいと思います。私たちは、災害救援や復興事業の在り方も地球規模で異論を唱えています。現代は、全てことが目覚ましく急激なスピードで変化を遂げる時代です。コミュニケーションの在り方、ラップトップ、モバイル端末です。何もかもです。しかし、世界中の災害時における救援と復興プロセス、その理論、やり方はほとんど同じのまま

です。あなたは、地震が起きたときに押し寄せる津波を止めるために壁を作ればよいとまだ考えることでしょう。インドは非常に災害の多い国の1つで、私たちはうんざりしています。そして、世界の他の国と同じように、私たちも、救援と復興対策を、今までと異なる形で講じることが今まで出来ておらず、あるいはその能力もないのかもしれませんが、私たちにとって、災害時の救援と復興事業でさえ「Cloth for Work」の対象であり、コミュニティがお返し出来ないのはなぜか見えているのです。災害は多くの破壊をもたらします。政府の復興計画が実施に至るまでは、それなりの時間がかかります。したがって、私たちの事業では、1週間後には道路や橋を清掃したり、修理したり、人々が積極的に参加しています。そして、尊厳を持って、彼らは衣服等を受け取ります。これは逆転の発想といえるでしょう。救済物資ももはや「救済」ではなくなります。救済物資はしょせん慈善行為以上のものではないのです。救援活動さえも尊厳のある行為となるのです。

グプタ: もう2つの事例を話させてください。1つ目は教育現場でのお話です。私は、子どもたちが世界中の慈善団体の最大の犠牲者になってしまったと強く思っているからです。ミス・インドになりたいければ、あるいはミス・ジャパンでもミス・ワールドでもいいのですが、彼女たちがステージ上から話さなければいけないことの1つが、「働く」ことの価値についてです。それは大変慈善的なものになっています。私たちが継続的に行っていることは、教育現場において、いくつかの概念を覆そうということです。私たちとしては、努力をした子は物で報いら

れるべきだと考えています。子どもがお風呂に入っていようがなかろうが、時間通り登校しようがしまいが、エチケットやしつけ、行儀について、どうやったら働きかけることが

Disaster- Using all the possible local resources..



Dignifying Relief..



School to School: Turning under utilised school material into a motivational tool !!



出来るのでしょうか。私たちは、私たちが集めた学校用の物資で報いるということを思い立ちました。ノート、鉛筆、スクールバッグ、靴、全てです。それで何が起こるのかというと、子ども時代のうちから自尊心を保てるので慈善行為の被害者にはなりません。そのような物をただ与えてもらうような権利は誰にもあ

りません。ある意味、子ども自身が向上しようとしているのです。子どもが自分自身に対

して働きかけているのです。そして、それによって報われるのです。なので、この学校の基本的な概念は、「報い」の概念なのです。子どもたちが良いことをすれば、学校用の物資で報いられ、こうした報いのプロセスを通じて子どもの遊び場となるセンター、これが

とても美しいセンターなのですが、そのセンターにおもちゃ等を置くようになったのです。そこで働いているある女性から、子どもたちは、昔は、なかなかこのセンターに来なかったのに、今は来るようになったと聞きました。こうしたことは些細なことかもしれませんが、やがて大きな違いが出てくると思います。



A step to convert hundreds of Aanganwadis into colorful and child friendly places. A kids center worker says –
“ Earlier the kids were not coming, now they don't want to leave !! ”



Turning discarded Cloth into 'MY Pad'
Addressing a women's basic need and opening up the taboo issue..

グプタ: 私が今日最後ご紹介するプロジェクトに移りましょう。これは、非常に憂慮すべきことですが、タブー視されているテーマでもあります。今からお話するのは、少女たち含め、多くの女性たちにとって深刻な問題です。国によって、それは生理用ナプキン、生理用パッド、あるいは、生理用タオル等、いろいろ

ろな呼び方がありますが、女性たちは、こうした布切れを毎月5日間ほど必要とします。しかしながら、インテリな人ほど、そして、教育を受けた人ほど、こうした問題には触れたいという傾向があります。生理のことを言うのは、女性たちにとっても非常に恥ずかしい、恥だというふうに捉えられていて、十分に議論されてこなかったという背景があります。市場で手に入る可能な限り高品質な製品を買おうが、私の国も含めて非常に多くの国々では、生理用の製品は黒いポリエチレンや新聞紙に包まれて売られています。私たちは、非常に単純な問いかけをしてみました。日常的な衣類すらないところで、生理用に一体何を使っているのだろうか、と。想像すれば分かることですが、グーグルで、「生理用

ナプキン」,「生理用パッド」,「生理用タオル」等の同義語を検索してみたら、最高品質のタンポンを見つけることが出来るでしょうが、他方、世界の半分の地域では、こうした問
いかけに対する研究は1つも行われていません。インドでもそうですが、インドの隣国で
もそうです。あるいは、多くのアフリカの国等でもそうです。援助のコンセプトの中で、
女性の生理の問題は、今でも、決して語られることのないタブー視された問題です。

グプタ: 女性の社会進出、教育や健康等、女性のエンパワーメントが重要視されている時
代に、こんなに小さな問題が見過ごされていることに、私は憤りを感じました。多くの貧
しい地域では、女性は生理になると、汚れた布のかけらを使ったりします。しかし、それ
を洗ったとしても、人目につく所には干せない、十分に乾いていない、汚れたまま、また
使う。そういったことが日常的になされています。例えば、1つのファミリー、一家の中
に2、3人の娘がいたとします。みんな生理のサイクルというのは違うので、同じ1つのも
のを順番に使いまわしながら利用しているのです。あるいは、スラム等の貧困地域では、
近所の女の子たちの間で同じものを使ったりすることもめずらしくありません。そして、
驚くべきことに、布がなければ、砂、木炭、麻袋、絨毯、ぼろきれ、新聞紙、プラスチック
のシート、使用済みの生理用ナプキン、そういったものを生理中の出血を止めるために
使っている、そんな現実があるのです。出血が止められるもの、吸収出来る物は全て生理
用タオルとして使われているのです。

グプタ: 2005年に、とある
家族に出会ったときに、
家族内のある女性が、イ
ンドでは普通にある、錆
びた鉄製のフック付きの
ブラウスの一部を使い、
生理用ナプキンとして利
用したために、破傷風で
なくなってしまったと耳
にしたことが、私の人生
の大きな転換点となりま



した。そこで、私たちは、この問題に着目し、いろいろと探求し、旅をする度に現実がど
うなっているかを模索しました。そこで、私たちが発見したのは、世界の人口の半分が生
理用ナプキンを持っていないという事実でした。ネパールやバングラデシュはもとより、
スリランカ、パキスタン、アフリカ諸国の半分の国では、インドより圧倒的に深刻な状況
です。なぜなら、幸いにもインドはまだ生理用ナプキンとして利用出来る織物が豊富に入
手出来る国だからです。ご存知の通り、インドは織物の輸出国だからです。したがって、

状況は深刻ながらも、まだインドでは対応することが出来ているのです。今日、実物を持って来ればよかったんですが、この写真にあるように、私たちが何をしているかという、綿で出来た布から生理用のナプキン、パッドというのを作っています。私たちは、これを生理用のパッドとは呼ばないで、"a better piece of cloth"（ちょっと良い布きれ）というふうに呼んでいます。1回当たりの使用コストが1円未満で作ることが出来、100%再利用可能です。これらは、女性が水さえあれば、洗って何度も使えるので、コストを1円未満に抑えることが出来ているのです。私たちは、都市部で集めた古着や使っていない洋服、そういったものの中の Cotton の素材の布を使って、こうした生理用のナプキンに変えて作っていくことをしています。これは、100%環境にやさしいものです。過去数年間に、400万個作りましたが、これらは従来の生理用パッドの1,000万、2,000万、3,000万個分に相当します。生理用パッド1つ1つが街のゴミから作られているのです。ともすれば、埋め立て地に行った廃棄物の布が生理用パッドになるのです。Tシャツの素材や靴下の生地が残らず下着に変わり、女性のための生理用ナプキンとして提供されます。



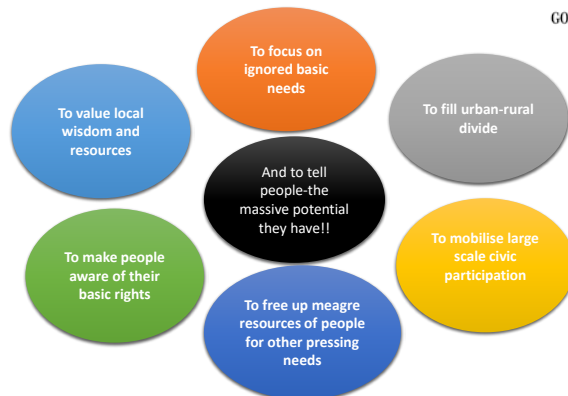
グプタ: これは、「ただの布切れにあらず」"not just a piece of cloth"というプロジェクトですけれども、布のかけらにすぎないということではなく、これは、私たちにとっての"non-issue", 「見過ごされた問題」の入り口だと思っています。もし女性たちが、生理中に困難を強いられているとい

う、この問題について黙っている状況のままであったら、このことは課題として上がってこなかったわけです。しかし、実際にある課題について、「見過ごされた問題」(non-issue)を、「見過ごされてはならない問題」(issue)として取り上げていかなければなりません。なぜなら、私が今お話しした生理用ナプキンの問題を解決することが出来れば、女性の健康を改善することが出来ることは自明の理だからです。ここで、皆さんもご存知かもしれませんが、「マラリアの治療に忙しすぎて、蚊の問題に対処出来ない」という言葉を思い起こして下さい。私はこれを蚊の袋小路と呼んでいます。もし蚊を殺せば、マラリアは起きないかもしれませんが、私が申し上げたいのは、従来の考え方を変える時が来ているということです。私たちは、どこかで率直になり、この世の中のロジックの半分はうまく機能していないと言わなければいけないと思います。

グプタ: ここで、このスライドにあるコンセプトを用いて、今までの話をまとめてみましょう。私たちは古着を社会変革のツールとして使ってきました。このように、まず、無視されている、人々から取り上げられていない基本的なニーズというものが何かということに着目します。それは、都

Establishing old material as a tool for social change

गून्ज..
GOONJ.. a voice, an effort



Somewhere the genesis of a parallel economy which is not CASH based but TRASH based !!

市と地方の格差を埋めるためのツールとなります。そして、実際に大規模な市民参加型のアクションを引き起こすということです。私たちの活動は、今、インドで起きている最も大きな市民運動の1つと呼ばれています。その過程で、何千・何百万ものアパートに暮らす都市部の住民や、何千・何百万もの農村に住む人々と生活を共にします。人々の情報源であるメディアを活用します。私たちの活動は、使われなくなった、一部の地域で不要な物が別の地域で活用出来るということを実現していますが、それだけではないんです。それだけでは、1日にご飯を2杯食べられるかどうかです。その他のお金は生地に費やすか、特定の物を買うかです。人々の物質的なニーズに対応した瞬間、農村に住む人々も似たような物質的なニーズを持つようになります。彼らも衣類や食べ物、その他様々な物を必要とするようになります。こういったことに1つ1つ対応することによって、彼らの限られた資源を解放し、その瞬間、それを教育、健康、その他の難しい緊急な 이슈に使うことが出来るのです。そして、もっと広範囲で大きな経済的な話になっていきます。決して、生地を集めて配布するということだけではないんです。そして、何よりも人々自身が彼らの権利というものに気付く。そういった気付きを起こすということを大事にしています。と同時に、地域には知恵や様々な豊かな資源があるということをよく認識するようにしています。例えば、私たちは、農村の人々が7月やその他の時期に、どのくらいの水が来るか熟知していることを知っているため、外部から技術者やコンサルタントを入れたり、近代的な機械を持ち込むということを決してしません。よそ者である私たちよりも、現地の人々の方が、地域にとってより良い橋を建設することが出来ます。最も重要なことは、実は、彼らには大きな潜在力というのがあって、実際に思うよりもたくさんのリソースにあふれているので、彼らが良い服を着るために他の人を頼らなくともよいということをお教えるということに尽きるのだと思います。私と他の人を差別化するのは、良い服を着ているかどうかです。彼らは技術を有し、独創性に富み、地域社会に対して、私たちよりもはるかに大きな働きをすることが出来ます。また、彼らには、私たちにはない伝統的な知恵があるので、良い服を着る人たちを頼る必要はないのです。

グプタ: 私の最後のスライドですが、前向きな話で締めくくりたいと思います。このスライドで皆さんに伝えたいことは、それがいかに小さなことであっても、それらをしっかりと理解し、他の視点で見ることが出来れば、世界がどのように変わっていくのかについて、お見せしたいと思います。そして、皆さんにも是非参加して頂きたいと思います。これは世界中でよく目にする光景、特に、あらゆる難民問題やその他の問題についてよく目にする光景でしょう。寝室が3つもあるような家を国のどこかに持っていたような人々が今は少ない手荷物を持ってさまよっているのです。それぞれの国では、最も豊かな層にいた人々が、他の国では最も貧しい人たちになるのです。したがって、これは非常に普通の光景です。そしてこれは、この世界に住む人間として、非常に煩わしいことです。お話を終える前に、次の2分間、1つのことに対して違う見方を持ってみるかということの重要性を伝えたいと思っています。どのように物事を異なる視点から捉えればいいのか？このスライドの子どもの写真についてコメントして頂きたいのですが、この子どもを見てまず頭に浮かぶ言葉、考え、文章は何でしょう？何が出てきますか？これを見て最初に頭の中に出てくる言葉、文章、考えは何でしょう？この写真を見て、皆さん、どんな言葉あるいはフレーズというのが頭の中に浮かぶでしょうか。

グプタ: 私の場合は、例えば、この男の子はおなかがすいてるんだろうな。なんてことを思ったりします。皆さんはどうでしょうか。

聴衆: 震えている。寒さに震えている。

Cloth matters !!



グプタ: 震えている。寒さに震えている。

聴衆: 寒がっている。

グプタ: この子の置かれている状況というのはどんなものでしょうか。

聴衆: 恐れ、怖いという感情。

DIGNITY matters !!



グプタ: 恐れ、怖いという感情。

グプタ: 実は、これが多くの援助機関や様々な団体というのがやっていることです。こういった写真を見せ続けることで、かわいそうという感情に訴える。こういったことを非常に多く行っているんですね。

Youth matters !!



グプタ: では、もし次の写真にコメントするとすれば、今度はどのようなものの、言葉、考え、文章が頭に浮かぶか、教えて下さい。あるいはあなたの気持ち。なんでも良いです。

聴衆: 裸。

グプタ: 裸であるということ。

グプタ: 裸, 怖い, お腹が空いている.

聴衆: 困窮している.

グプタ: 困窮している. 他には?

聴衆: 悲しい.

グプタ: とても大切なことなので, ぜひ感じて考えてみてください. 世界がどのように見えるか. Tシャツを着ていない世界がどのように見えるか, です. これは, とても大事なことです.

グプタ: 先日, 私は学校を訪問しましたが, 皆さんにした質問と同じ質問をしたところ, 子どもたちは, 写真に写っている子どもについて思うところを全て話してくれました. 「皆さんは貧困の意味を知っていますか? これについてはどういう意味ですか?」と質問したら, 「えっと... 世界」と答えてくれました. 「皆さんとこの人の違いは何でしょう?」と質問したら, スキルだという答えが返ってきました. この写真には写っていないもの, 見えないものをあれこれと答えてくれました. この写真から教育をどのように見るのでしょうか? スキルをどのように見るのでしょうか? その人を見るだけで, お金があるかどうかをどうやって見るのでしょうか? その人を見るだけで, その人の知恵をどうやって見るのでしょうか? あなた方が外で, 何も来ておらず何も食べておらず, お風呂にも入っていない状況で外へ出たとすれば, 写真に写っている彼のように, あなた方がお金持ちの息子と見なされるのでしょうか? それとも貧しい人として見られ, そのように扱われるのでしょうか? 残念ながら, 衣服は貧困を判断する最初の材料となります.

グプタ: 少なくとも, 今, 皆さんに質問したように, 全てがネガティブな, この裸の子どもを見たときに否定的な表現ばかりが出てきたと思います. 1つとしてポジティブな, 何か前向きな意味の言葉というのは出てこなかったと思います.

グプタ: では, この写真ではどうでしょうか. 左側の服を着た男の子. 同じ男の子ですが, この子を見たときに同じように否定的な表現というのが出てくるのでしょうか. 何かをものすごく必要としている, 何か欲しがっている, 何か欠けている, そのように見えるのでしょうか. 服を着ても彼は変わらず貧しいかもしれません. 貧しいかもしれませんが, ただ, 先ほどの服を着てない男の子と比べて印象はどうでしょうか. 1つの見方としては, 自信に満ちあふれているようにも見えます.

グプタ: 同じ教育を受ける状態になったときに、この2人を比べたときにどうでしょうか。教育を受けて効果が出てきているということが、服を着ているということ1つだけを見てむしろ状況も変わるのではないのでしょうか。私は、世界中の政府や国際機関に、「この子を学校につれていくことは、この子より簡単なのは常識ではないでしょうか？この子の健康だとか教育だとか、あれこれ語る方がこの子よりずっと簡単ではないのでしょうか？」なぜなら誰かの中に自信を持ち込むには何年もかかるからです。布切れはそれをたった数分で実現出来ます。

グプタ: これはたった1人の話です。例えば、この写真の男性と席に着き、村の経済、村の過去や将来、村の開発について語るなど想像も出来ないでしょう。あなたは、ひょっとすると道さえこの男性に聞こうとは思わないかもしれません。そしてこの男性のことをおじいさんと呼ぶでしょう。しかし、右側の写真の男性を見ると、突然、知恵のある人に見えてしまうかもしれません。全ての理由は、彼が着ているこのシャツにあります。彼は村の経済について話をする相手としては申し分ないでしょう。彼はとても経験豊富な人です。分かりますか？そうしたことが彼の顔に出ているのです。こうやって物の見方は変わっていくのです。さらにですよ。この人が立っている隣へ行き、彼に自分から話しかけるでしょう。私の彼に対する言動は変わります。例えば、私が、この立派なネクタイとジーンパンではなく、汚れたシャツや布切れを着ているのであれば、早稲田大学も中に入れてくれないかもしれません。

グプタ: そしてもう1枚別の写真もお見せ出来ればと思います。あなたは、この男性の隣に行こうともしないでしょう。もし彼がどこかの屋台で食事をしていれば、あなたは、その屋台で食べようとはしないでしょう。そして、彼に対してもネガティブな言葉しか思い浮かべないでしょう。右と左の写真を見比べたときに、彼のひげ一つとっても、印象が違うのではないのでしょうか。

グプタ: これが、私の小さな古い衣服が、貨幣に変わる価値あるものとなり、それがまた社会改革のツールになったというストーリーです。私たちは、このツールを使って人々の考えを変え、人々が取り組む課題を変えるようとしています。これは、私たち自身に対して、そして、より大きな世界に対しても、従来の取り組み方を止め、変革する時が来たというチャレンジでもあるのです。上手くいっていないやり方や考え方があることも受け入れましょう。物事が素晴らしく上手くいっていると考えるのではなく、そのような傲慢さから少しだけ抜け出して、謙虚さをもって、世界は現在光が当たっている課題のみによって苦しんでいるのではなく、見過ごされている課題によっても苦しめられているのだということをご理解ください。ご清聴ありがとうございました。



H.O: J-93, Sarita Vihar, New Delhi-76
☎ 011-26972351 / 41401216 ✉ mail@goonj.org
🌐 www.goonj.org 📺 goonj.org 📺 +goonj 📺 @goonj
GOONJ.. a voice, an effort